2015年1月31日 発行

市史だより
Fukuoka

20
史的再発見マガジン
[シシダヨリ・フクオカ]
Autumn/Winter 2014
TAKE FREE

特集
日佐さんぽ

連載コラム「歴・史・万・華・鏡」「福岡市史への歩み」
部会だより（考古・古代・中世・近世・近現代・民俗）

曰佐・横手・横手南町・的場の一帯は、福岡都市高速環状線がJR博多南線と頭上で交差し、住宅街に新しく横手中央通りが開通するなど、近年風景が一変した地域です。

しかし、住宅街に一歩足を踏み入れると、思わぬ場所でいくつもの記念碑やお堂に出会い、また、田畑と家々の合間を縫うように流れる小川や水路には、かつての景色を見ることができます。どこでも見かけるように思えるお寺や小学校も、以前は別の顔を持っていました。

今号は、新しい景色のなかにたくさんの歴史を発見できる町、曰佐一帯を歩いてみましょう。

●弥生時代の治水事業

横手中央通りの南端、福岡外環状道路と交わる横手南町交差点付近では、弥生時代早期の灌漑水路や、弥生中期後半と思われる四ヵ所の井堰をともなう貯水施設が見つかりました（笠抜遺跡）。井堰周辺からは、木製農具や建築部材、銅矛の破片などの鋳造関連遺物のほか、赤色顔料を塗られた多数の土器が出土しています。また、この貯水施設から見つかった線刻のある鐸形土製品にも赤色顔料が塗られていました。赤色顔料は祭祀との関連が考えられることから、那珂川に近いこの周辺では、水辺の農耕祭祀が行われていたのかもしれません。五〇〇メートル東南には「奴国」の中心（須玖遺跡群／春日市）があるため、先進地域一帯の農業や治水事業を知る手がかりとして注目されています。

●オサと読みます

福岡市のなかで読みにくい地名としてよくあげられる曰佐ですが、この地域は古代から「曰佐」と呼ばれていました。十世紀に成立する『和名類聚抄』には、筑前国那珂郡曰佐郷の名が記され、写本によっては、「乎左」「ヲサ」といった読み方も添えられています。

古代においてオサとは、「通事」「訳語」などと書いて通訳をつかさどる役職名である一方、渡来系の氏族名でもありました。古代の曰佐郷は、こうした通訳もしくは渡来系の人々に関わる場所だったのでしょう。

●岩戸料と観音様

地名の話をもう一つ。明治時代の調査によると、旧横手村には「岩戸料」と呼ばれる場所がありました。横手にお住まいの方によれば、今の横手三丁目の一部にあたるそうです。中世、現那珂川町一帯には、岩門（岩戸・石門とも）と呼ばれる荘園が置かれていましたので、「岩戸料」は、かつてこの荘園に関係した場所と考えられます。

ところで、その横手三丁目には、念誉行明（一五〇一～一五六三）が創建したと伝えられる、正法寺があります。境内には古くから観音堂が置かれ、『筑前国続風土記附録』（天明四〈一七八四〉年の藩命により編さん）にも紹介されています。言い伝えによれば、このお堂の観音様は、享保の飢饉の頃に那珂川の洪水によって、今光村（現那珂川町今光一帯）の方から横手村まで流されてきたとのこと。今光村は、近世に「岩門河内」と総称されていた地域の一部です。

今では異なる自治体に属する横手と今光ですが、こうした観音伝説には、中世の人々が両地域を行き来していた歴史が読み込まれているのかもしれません。

この正法寺の一帯は、近代になると、別の顔を見せるようになっていきます。

●「曰佐」はどこを指す？

現在の曰佐・横手・横手南町・的場の一帯は、近世ではおおよそ上曰佐村・下曰佐村・

旧曰佐小学校区の現在

アクセス

❶ 横手公民館（南区横手4-24-9）
【西鉄バス】「横手一丁目」停留所下車、徒歩5分

❷ 正法寺（南区横手3-20-5）

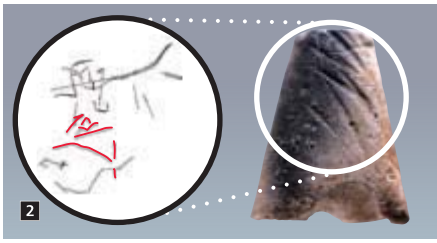
❸ 曰佐小学校（南区横手3-42-1）

❹ 宝満宮（南区横手3-41-25）
【西鉄バス】「横手四丁目」停留所下車、徒歩10分

❺ 曰佐1号公園（南区曰佐1-14）
【西鉄バス】「下曰佐」停留所下車、徒歩10分

❻ 住吉神社（南区曰佐1-8-11）

❼ 曰佐公民館（南区的場2-17-6）
【西鉄バス】「的場二丁目」停留所下車、徒歩5分



1 笠抜遺跡で見つかった弥生時代早期の灌漑水路の断面（深さ約140cm）。この水路から分岐する2条の支線水路も見つかった　2 笠抜遺跡の鐸形土製品（高さ7.2cm）。表面には赤色顔料が塗られ、人物などが線刻されていた。左下には、ひし形の頭部に逆三角形の上半身、手には武器を持った人物が見える（図中の赤線で表記した部分）。絵画表現がある鐸形土製品は、全国で10例ほどしか見つかっていない　3 この付近がかつて「岩戸料」と呼ばれていたという。左手の道は横手中央通り　4 曰佐尋常小学校の前身である旧曰佐小学校（明治7年創立）の跡地。現在は曰佐1号公園となっている　5 明治時代の曰佐村役場。明治時代、役場は横手のなかで一度移転しており、この写真がどの時点で撮られたものかは定かではない　6 曰佐小学校の南東側に移った村役場（昭和20年代後半）　7 曰佐小学校舎増築時の記念写真（昭和初期ヵ）　8 現在の横手3丁目。左手が曰佐小学校、右手が正法寺。正法寺境内の観音堂は地域の人々によって大事にされ、8月にはその前で横手十日相撲が開かれる　9『ふるさと横手』に描かれた昭和9年頃の曰佐小学校。『ふるさと横手』は、制作当時の横手の風景写真と一緒にパネルに貼られ、横手公民館に保管されている　10 昭和29年に曰佐小学校校庭で開催された乳牛の品評会（右）。奥に遊具や校舎が見える。その横は宝満宮の杜。昭和17年頃から酪農組合を組織していた曰佐は、福岡県下でも有力な酪農地域だった。曰佐の牛乳は五十川にあった森永乳業に出荷され、二日市の工場で精製されていたという。現在の曰佐4丁目には立川牧場が、横手南町には遠藤牧場があった。左の写真は、警弥郷の広田家で飼育されていた乳牛。曰佐村全域で酪農が盛んであったことを物語る1枚

横手村（および枝郷の平原村）に含まれていました。明治二十二（一八八九）年になると、この三村と警弥郷・井尻・五十川の各地域が合併し、南北四キロメートルにも及ぶ那珂郡曰佐村となりました（明治二十九年からは筑紫郡）。曰佐村は昭和二十九（一九五四）年に福岡市と合併し、その後の町界町名変更を経て、現在に至っています。

一方で、明治三十五年には現在の曰佐小学校と同じ場所に曰佐村立曰佐尋常小学校（昭和二十二年から村立曰佐小学校、同二十九年からは福岡市立）が設立され、曰佐村全域から子供たちが通いました。しかし、昭和二十九年四月の曰佐北小学校（現宮竹小学校）を皮切りに、弥永小学校（昭和四十五年、さらに昭和五十三年には弥永西小学校が分離）、高木小学校（昭和五十七年）、そして横手小学校（平成七〈一九九五〉年）と学校の分離・新設が進み、広大だった曰佐小学校区は最終的に六つの校区になりました。

このような行政区域と校区の変遷は、世代や住んでいる地域によって、異なる「曰佐」のイメージを生んでいきました。

●「曰佐」が集まる場所

広大な村域を持つ曰佐村のなかで、人々が集まる村役場や小学校は、地理的に村の中央にあたる横手に置かれました。

最初の村役場の場所は正確には分かりま

特集

広大な地域ゆえに重なり合い、伸縮してきた「曰佐」の歩みを振り返る。

曰佐さんぽ

せんが、明治三十年頃には正法寺の境内に移されました。正法寺の目の前には小学校が、さらに周辺には派出所・火の見櫓・農協施設などが建てられ、この一帯が村の中枢となりました。ちなみに、この正法寺の境内には古くからイチョウの木が立っています。今でこそ落雷を避けるために低く剪定されていますが、往時は井尻から見えるほど高く、曰佐に向かう人々にとっての目印になっていたそうです。

その後、村役場は昭和二十五年頃になると青年学校跡（現在の曰佐小学校プール付近）に移り、前後して派出所・火の見櫓・農協も小学校の南東側に移転していきました。曰佐村が福岡市と合併すると、村役場は出張所と公民館になり、出張所の廃止後も、しばらくは公民館として使用されました。

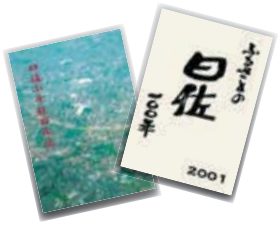
また、小学校も学校行事だけでなく、校庭で校区の運動会や乳牛の品評会が開催されるなど、地域の中心的役割を果たしていきました。

▲ 村立校時代、曰佐小学校の正門に掛かっていた学校銘板（右）と、昭和40年代まで実際に使われていた鐘（左上）。鐘は昭和28年卒業生からの寄贈品で、チャイムがない時代には、この鐘を鳴らして授業時間などを知らせていた（左下）

● 浮かび上がる「曰佐」

曰佐小学校は平成十三年に創立一〇〇周年を迎え、『曰佐小学校百年誌』（平成十三年）と『ふるさとの曰佐一〇〇年』（平成十四年）が制作されました。現在の曰佐小学校だけでなく、分離・新設された各学校の歩みも含まれており、旧曰佐村全域に卒業生のいる曰佐小学校ならではの構成です。またこれらには旧曰佐村の写真や資料なども豊富に収録されています。百年誌は学校史としてだけでなく、村史としての性格も持っているといえるでしょう。

こうして曰佐の歩みを振り返ると、旧村・学校・町名と、重なり合う「曰佐」を見ることができます。それは豊かな地域像を示しているともいえるのです。



● 石碑やお堂を巡ってみよう

曰佐・横手を歩くと、しばしば石碑を目にします。庚申塔や曰佐村出身の強豪力士「袖乃浦伊三」の顕彰碑、戦没者の忠魂碑に、はたまた温泉掘削の記念碑など、建立された時代も種類もさまざまです。

なかでも、一見地味ながら貴重なものは、住吉神社と上曰佐大日堂の板碑です。板碑とは、板状の石に仏像や梵字などを刻んだもので、死者の供養や、願主の死後の法事を営む目的で作られました。住吉神社と上曰佐大日堂の板碑にも梵字が刻まれています。残念ながら風化が激しく、今では肉眼での判読は困難な状態ですが、以前採取された拓本によると、上曰佐大日堂のものには阿弥陀如来を示す梵字「𑖀」（キリーク）が刻まれていることが確認できます。加えて、この板碑には、如来形が確認できる程度に残されており、当時の信仰を現在に伝えています。

▲ 上曰佐大日堂の板碑。
左の板碑に如来形が確認できる

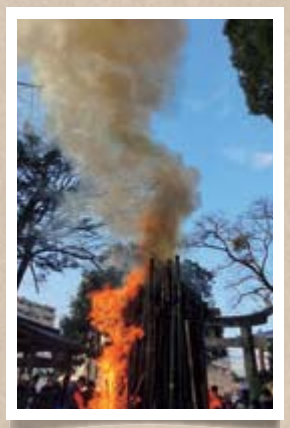
① 横手日切地蔵　② 享保飢饉地蔵　③ 博多温泉の碑　④ 祇園社
⑤ 観音堂　⑥ 忠魂碑ほか　⑦ 下曰佐地蔵堂　⑧ 孝子藤勝太郎の碑
⑨ 板碑（住吉神社境内）　⑩ 袖乃浦伊三の碑　⑪ 上曰佐大日堂と板碑
● 庚申塔

【横手と日佐のほんげんぎょう】

2015年1月11日午前8時。横手の宝満宮にしつらえられた竹組みの櫓に火が灯りました。ほんげんぎょうの始まりです。櫓周囲に積まれた正月飾りがまず勢いよく燃え、境内に濛々と煙が立ちこめます。じき竹が爆ぜる音が辺りに大きく響き始めると、その頃には婦人会の用意したぜんざいがふるまわれ、集まった近所の人々が笑顔を見せていました。

翌12日には、お隣の日佐の住吉神社でも同様にほんげんぎょうが行われました。ぜんざいなどのふるまいのほか、竹筒にお神酒を入れ火で温めたカッポ酒も用意されます。

▲横手のほんげんぎょう
（主催・横手伝統行事実行委員会）



▲日佐のほんげんぎょう
（主催・下日佐自治会）

横手のほんげんぎょうは、昔は集落の辻々で行われていました。一度途絶した後、昭和40年代に横手公園で復活、その後宝満宮に場所を移し、現在に至っています。日佐も似た経緯をたどっており、数ヵ所の辻で火を焚いていたものが途絶え、その後、外環状道路用地の空き地で復活。道路建設が始まると今度は住吉神社で行うようになったとのこと。

両地区とも、近所数軒の行事から地域全体の行事になったことで規模は大きくなったそうです。竹の確保と伐採、櫓造り、ふるまいの用意、火事に備えた境内の木の剪定や消火用の水の用意と、大変な準備ですが、地域の人々の熱意によって支えられています。

開催場所もありようも推移してきた行事ですが、「昔は辻々でやりよったとよ」と懐かしそうに目を細める年輩の人々と、竹の爆ぜる音に歓声をあげる子供達の姿からは、地域の今と昔、自治会組織と校区の子供達を結びつける、現在のほんげんぎょうが果たす役割をかいま見ることができます。

日佐こらむ

【お伊勢まいりは大飛躍】

▲清水大次郎たちがたどった旅程

横手の宝満宮には、かつて日佐村からお伊勢まいりに行った人々の記念として、絵馬（明治29〈1896〉年）と灯籠（大正6〈1917〉年）が残されています。このうち、大正6年の旅の様子は、『大飛躍』という旅日記に見ることができます。これは旅行者のなかの一人、横手の清水大次郎という人物によるもので、軽妙な筆致により、道中の様子が細かく記されています。

日記は「吾等は大正の大御代に生を稟け、井底の蛙を学んで田舎暮らしに終りなんや、いざ都の空に飛び出でて、往古の事蹟現今の趨勢を地理に歴史に研究し、歌に話に観察して日頃の鬱憤晴らす可し」との決意表明から始まります。4月2日早朝、有志一同は宝満宮に参拝し、万歳三唱で家族親族に見送られて出発しました。汽車と船を乗り継ぎ、各地の観光地を巡りながらの道中です。出発から7日目には目的の伊勢に到着。しかし、参詣の感想はやや淡泊で、彼らにはお伊勢まいりより各地の観光がメーンだったようです。

伊勢を発った一行は東海道を北上し、関東まで足を伸ばしました。なかでも東京では、「今迄は古来の神社仏閣に驚き、心も古代の風に感化されしが、花の都の真中は、大正六年御代の風、（中略）文明開化の趨勢は遙かに大坂市況に擢んでたり」とまずその賑わいに驚き、宮城（皇居）を遠くに見ては、「吾等の如き田舎農夫も陛下の膝元に接して拝することを得たるは、明治聖代の賜なり」と感動しきり。結局東京観光に3日間を費やし、発展目覚ましい帝都を心ゆくまで満喫したのです。

見るもの触れるもの、すべてに大感動だった一行は、20日間の大旅行を終えて日佐村へ帰郷、その足で宝満宮に参拝し、後日、旅の記念として灯籠を奉献しました。

彼らにとってこの旅は、旅日記『大飛躍』の名が示すとおり、日佐村から広い世界に飛び出した、人生を変える一大事だったことでしょう。これらを見ると、大正という新しい時代に、めまぐるしく変化した世の中を見てきた人々の熱気が、今でも伝わってくるようです。

▲宝満宮の灯籠（高さ約2.5m）。向かって右の灯籠が清水大次郎一行により奉献されたもの。「伊勢参宮紀念」という銘がある。なお、左の灯籠には「日露戦争戦役軍人」（明治29年）とある

●『新修 福岡市史　資料編 近世２』刊行記念講演会「黒田家家臣の実像に迫る」を開催しました

11月８日（土）に福岡市博物館講堂において講演会を開催しました。

この講演会は、刊行したばかりの『資料編 近世２』に掲載された史料の紹介や、刊行の意義について市民の皆様にお伝えするために企画したものです。当日は大変盛況で、230名の皆様に来場いただきました。

高野信治（たかの のぶはる）先生
（九州大学大学院教授）

髙山英朗（たかやまひでお）先生
（福岡市博物館）

鈴木 文（すずき あや）先生
（福岡市総合図書館）

岩﨑義則（いわさきよしのり）先生
（福岡市博物館）

報告に先立って、まずは編集責任者である高野先生から、本のコンセプトや資料の収録基準などに触れながら、『資料編 近世２』について解説いただきました。

次に髙山先生から福岡藩の家臣団を区別する基準や、家臣の履歴や由緒を示す史料について、続いて鈴木先生からは家臣の一代記を元に、「職」と「家」の問題や明細書に見える「家」、親族とのつながりについて報告いただきました。最後に岩﨑先生からは、大目付であった大野貞正（おおのさだまさ）が記した当時の公用日記の内容を見ながら、貞正の勤務状況や、大目付の果たす役割、天保（てんぽう）４（1833）年当時の福岡藩で起こった事件と、そこから見える諸問題についてお話しいただきました。

また、福岡市博物館の企画展示室では、関連展示である「家臣とくらし」も催され（会期：10月15日～12月14日）、『資料編 近世２』に翻刻・掲載されている資料も展示されました。

お知らせ

●『新修 福岡市史』新刊が好評販売中です

■資料編 中世２ 市外所在文書（A5判 1,000頁／頒価 5,000円）
■資料編 近世２ 家臣とくらし（A5判 1,100頁／頒価 5,000円）

ご購入に関するお問い合せ
福岡市博物館ミュージアムショップ：電話 092（823）2800

歴・史・万・華・鏡

テキスト●田鍋 隆男

百道（ももち）海水浴場に水上機の飛行場があった！

大正七（一九一八）年七月七日に、福岡日日新聞社（現 西日本新聞社）は百道海水浴場を開設した。脱衣所や休憩所・売店、そして救護所といった諸施設、海上には滑り台や飛び込み台などが整備され、さらに、福博電車の終点今川橋（いまがわばし）停留所から歩いて五分と、交通の便の良さもあって、昭和三十年代頃までは大勢の海水浴客で賑（にぎ）わった。この白砂青松の百道海水浴場が、民間航空事業の黎明（れいめい）期に、水上飛行機の発着場の候補地となった。

大正十三年、大阪の木津川（きづがわ）飛行場を拠点にした日本航空株式会社（以下日航と略、いまのJALとは別会社）は、既設の大阪―別府間の航空路線を延長して、大阪―福岡航空路線を開設するため、百道海水浴場に出張所を設けた。当時の新聞によれば、四月十一日、別府から杵築（きつき）―宇島（うのしま）―多々良川（たたらがわ）―百道のコースを通って、水上機が百道海水浴場に飛来した。十五日には福岡上空を低空飛行したり、機体から下ろした縄梯子（なわばしご）に同乗者が片手でぶら下がっての曲芸をして福岡市民の注目を集めた。十八日には福岡から大阪へと復航して、週一便の試験運航を始めた。七月二十六日には、料金一〇円の遊覧飛行を催した。二十八日の便は箱崎（はこざき）汐井浜（おいはま）沖合に着水し、筥崎宮（はこざきぐう）神官のお祓（はら）いを受けて、本殿廻廊修築寄付金募集の広告を積み込み、大阪へと離水した。八月には一五分間の博多湾一周飛行を行って市民に楽しんでもらい、百道出張所に海軍大尉が出向いて定期運航を見守ったりしていたが、日航は九月二日に、水上飛行機の発着場を西公園東側の入船町（いりふねまち）（現 中央区港）の海岸に移転することにした。わずか四ヵ月余の百道飛行場であった。ちなみによく知られた名島（なじま）飛行場からの大阪―福岡間の運行開始は、昭和四（一九二九）年のことである。

［終］

▲ 水上飛行機（『福岡日日新聞』大正14年4月21日）。試験運行から１年後、わが国最初の郵便飛行機（日本航空株式会社）が、大阪から３時間45分かけて入船町の発着場に着いた

▲ よかトピア通りの百道浜橋の西詰（早良区西新2丁目）にある百道海水浴場跡の碑

考古

平成二十五年に刊行した『特別編 自然と遺跡からみた福岡の歴史』の内容をご紹介する特設ウェブサイトを作りました。

この巻は人々の歴史の証である遺跡と自然の環境変動に着目し、先史から現代までの福岡のなりたちを解説しています。特設サイトでは本の目次のほか、一部の節については内容をご紹介するページを設けています。特に第Ⅱ部「遺跡からみた福岡の歴史1 ―遺跡と地形環境」の紹介ページでは、本編に掲載している各時代の遺跡分布地図を選んで見ることができます。特設サイトには、福岡市史ホームページ（次頁末参照）からアクセスすることができます。ぜひ一度ご覧ください。

古代

毎年増え続ける墨書土器や文字瓦などの出土文字資料は、歴史を考える際に、新たな材料をもたらしてくれます。古代専門部会ではこれらの出土文字資料を、筑前・筑後の範囲で収集してきましたが、より広い視野で分析できるように、新たに福岡県全域まで広げて集めることになりました。ある地域で出土した文字資料をほかの地域のものと比較してみると、さらによく読み取れたり、意味がはっきり分かったりすることがあります。市史の編さんをきっかけに、思わぬ再発見も期待されるところです。

中世

『資料編 中世3』には日記などの古記録を収録する予定ですが、古文書とは違う日記ならではの記述によって明らかになることも多いのです。

例えば「正任記」という大内氏の重臣である相良正任の日記には、若くして筑前守護代の要職にあったエリート家臣である陶弘護（一四五五～一四八二）が、日々の激務や家臣同士の衝突の仲裁などに追われ、ついには守護代を辞めたいと言い出し、主君である大内政弘から留意されている様子が記されています。今も昔も管理職のつらさは変わらないのだなと思わせられますが、このような記述が見られることも日記を読む楽しみの一つといえます。

近世

『資料編 近世2』を刊行しました。NHKの大河ドラマ「軍師官兵衛」では、黒田家家臣にスポットが当てられることはあまりありませんでしたが、黒田如水・長政父子の華々しい活躍の裏には、多くの家臣の働きがありました。その働きは、それぞれの家の由緒という形で後世に伝えられました。『資料編 近世2』では、如水・長政を支えた家臣の家の由緒を確認することができます。

ドラマ「軍師官兵衛」は終わりましたが、『資料編 近世2』を手にとって、ドラマでは描かれなかった黒田武士たちの活躍ぶりを見てみると、また違った発見があることと思います。

近現代

現在編集中の『資料編 近現代2』には明治四十年代の北筑軌道関係資料を収録します。福岡の近代都市形成には交通網の整備、特に鉄道の敷設が不可欠でした。北筑軌道は当時の糸島郡と福岡市内を結ぶ計画でしたが、他社との競合もあって、今川橋―姪浜―今宿―加布里を繋ぐことになりました。明治四十三年に今宿―加布里間で開通しましたが、その後すぐに譲渡され、最終的に姪浜―今川橋間は路面電車に、姪浜―加布里間は筑肥線に引き継がれます。国立公文書館に所蔵されている公文書から出願書類、地元の嘆願書、営業計画書などを抜粋して収録します。

民俗

前号までしばらく『民俗編二 ひとと人々』の内容や進捗についてお知らせしてきましたが、いよいよ発行年になり、編集作業も大詰めに入りました。

一方、民俗編最終巻となる第三巻の内容検討も始めました。既刊の『民俗編一 春夏秋冬・起居往来』では、市内で行われる一年間の祭礼に多くの紙幅を費やし、いわば「福岡市の一年」に着目した巻ですが、三巻の題は『夜と朝』（仮）。今度は「福岡市の一日」にポイントを置いた巻になりそうです。一・二巻とはまた違った視点で市民生活を描きだす予定ですので、こちらもどうぞお楽しみに。

SF Columun

福岡市史への歩み

volume 19

文＝田坂大藏（福岡市博物館研究指導員）
Text : Daizo TASAKA

前回は「まんが 福岡市の歴史」制作企画案が市役所内部で浮上した契機の一つとして、「ボルドーの歴史」という本についてお話ししました。もちろん前回のことだけが「まんが化」という発想の契機とは思ってはいません。ちょうど、大手出版社がさまざまな学習まんがシリーズを出し、歴史を題材としたまんがシリーズなどが評判になっていた頃です。ずいぶんと幅広く「まんが化」への思いがあったことは確かでした。

「まんが化」の次に出てきたのは、「ビジュアル化」というキーワードでした。筆者は「まんが化」を実現するためには、史実の検証はもちろんのこと、その他にも衣食住にわたる時代考証、あるいは使用言語は標準語か博多弁か、はたまた福岡弁かという、実は大変厄介な問題があるということを説明し、「まんが化」を発想した人々にもしっかりと理解してもらいました。

ところが、それではとばかりに出てきたのが、あまたの分野の歴史的資料を写真に撮って、現代語でコメントをつけ、物語を構成するという、写真週刊誌ばりのスタイルを持ったものはできないか、という案でした。筆者をはじめ、さまざまな人が各々の立場でこれに対応したのはもちろんのことでした。

両案とも根幹には、一般の市民が予備知識なしに楽しく福岡市の歴史が概観できる本は作れないか、という考えがあることにほかなりません。しかし、そのための基本となる福岡市の歴史的歩みについては、既存の歴史書やこれまでの周年記念刊行物を参照するにとどめるというのです。つまり、より精細な史実を検証することや、そのようにして判明した史実をダイナミックに構成することなどに時間や予算や人を投入することはせずに、より簡単に素早くできないかという安易な発想にほかならないのです。

行政マンとしては、事業を実施するにあたり、効率よく、短期間、低コストで完成させることを考える必要はありましょうが、日本のなかでも特異な歴史を歩んだとされる福岡市の歴史を、そのような方法で編さんすることができると本気で考えているのかと、心の底から残念に思う以外にありませんでした。

このような動きの根底には、昭和34（1959）年から刊行している「福岡市史」を今後どうするのか、その将来方針が定められていなかったことが考えられます。この時点の「福岡市史」は、総務局統計課（当時）で編さん作業が行われていたのですが、この「福岡市史」は行政内部の資料を中心に「市政の歩み」を追っているため、編さん事業の節目が設定しにくいという事情がありました。そんななか、「昭和」から「平成」へ移った頃から急に、無原則でこのような新しい形の「福岡市史」を作るという話が持ち上がったのです。新しく事業が立ち上がる際には、一時的な混乱はあって当然かとも思えますが、ポスト「福岡市史」への思考はしばらく協議の時間が必要だったのです。

【参考文献】
安部隆典『横手宝満宮の石碑と横手春秋』（横手三丁目公民館、1996年）● 清水大次郎『大飛躍』（蕃書房、1994年、原著1918年）● 常松幹雄「鐸形土製品に刻まれた絵画について」（石野博信編『初期古墳と大和の考古学』学生社、2003年）● 広田久雄『警弥郷の歩み ふるさと絵史』（広田久雄、1984年）● 広田久雄『ふるさと絵史』（広田久雄、1984年）● 福岡市教育委員会編『外環状道路関係文化財発掘調査報告書18 笠抜遺跡―第1・2次調査報告―』福岡市埋蔵文化財調査報告書第752集（福岡市教育委員会、2003年）● 福岡市教育委員会編『笠抜遺跡2―第3次調査報告―・大橋E遺跡7―第11次調査報告―』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1071集（福岡市教育委員会、2010年）● 福岡市教育委員会編『福岡市の板碑』（福岡市教育委員会、1992年）● 福岡市農業協同組合総合企画課編『福岡市農業協同組合40年史』（福岡市農業協同組合、2003年）● 福岡市農業協同組合年史編纂室編『福岡市農業協同組合二十年史』（福岡市農業協同組合、1984年）● 福岡市南区民俗文化財保存会編『南区ふるさと』（福岡市南区民俗文化財保存会、1992年）● 福岡市役所編『福岡市史 昭和編資料集・後編』（福岡市役所、1984年）● 福岡市役所編『福岡市史 第5巻昭和編後編（1）』（福岡市役所、1970年）● 福岡市役所編『福岡市史 第9巻昭和編続編（1）』（福岡市役所、1990年）● 福岡市立曰佐小学校創立百周年記念事業実行委員会記念誌委員会編『曰佐小学校百年誌』（福岡市立曰佐小学校創立百周年記念事業実行委員会、2001年）● 福岡市立曰佐小学校創立百周年記念事業実行委員会資料室委員会編『ふるさとの曰佐―〇〇年』（福岡市立曰佐小学校創立百周年記念事業実行委員会、2002年）

【資料所蔵】
曰佐小学校 ►P3⑦／P4上段右・上段左上 ● 市史編さん室 ►表紙／P3③・④・⑧／P4下段／P5／P6 歴史万華鏡 下／P8「表紙の写真」解説 ● 広田喜久雄 氏 ►P3⑩左 ● 福岡市埋蔵文化財センター ►P3①・② ● 横手公民館 ►P3⑨

【転載】
福岡市教育委員会編『外環状道路関係文化財発掘調査報告書18 笠抜遺跡 ―第1・2次調査報告―』福岡市埋蔵文化財調査報告書第752集（福岡市教育委員会、2003年）に加工 ►P3② 図面 ● 福岡市立曰佐小学校創立百周年記念事業実行委員会資料室委員会編『ふるさとの曰佐―〇〇年』（福岡市立曰佐小学校創立百周年記念事業実行委員会、2002年）►P3⑤ ● 福岡市立曰佐小学校創立百周年記念事業実行委員会記念誌委員会編『曰佐小学校百年誌』（福岡市立曰佐小学校創立百周年記念事業実行委員会記念誌委員会、2001年）►P3⑥／P4上段左下 ● 広田久雄『ふるさと絵史』（広田久雄、1984年）►P3⑩右 ● 西日本新聞 ►P6 歴史万華鏡 上

【協力】
曰佐公民館 ● 曰佐小学校 ● 尾上美恵子 氏 ● 清水博之 氏 ● 正法寺 ● 藤淳 氏 ● 広田喜久雄 氏 ● 広田千津代 氏 ● 湯口淑 氏 ● 横手公民館

【写真撮影】
新田岳（cubicface）►表紙／P8「表紙の写真」解説

横手もたくさんの参拝者で賑わいました（宝満宮）

表紙の写真

年越しの火に集う人々［曰佐／住吉神社］

年末、地元の方に年越し祭の話を聞いた我々は、大晦日の夜、曰佐と横手の火祭りにお邪魔しました。この年越し祭は、曰佐では「晦日祭」、横手では「歳越火祭り」と呼ばれ、どちらも氏子の皆さんを中心に毎年開催されています。ところが当日、福岡市は朝からの冷え込みに加え、ひどい暴風で空は荒れ模様。この嵐ではよもや中止かと心配しましたが、夜になるといくぶん風も収まり、なんとか無事に開催されました。午前0時少し前、境内で火が焚かれ始めると、近所の方々がぞくぞくと初詣に訪れます。子供たちもこの日ばかりは深夜のお出かけが許されて、とても楽しそうでした。曰佐も横手もおよそ夜中の3時頃まで、年によっては元日の朝まで火を焚くとのこと。夜中の2時になる頃には雪も舞い始め、曰佐と横手を“はしご”した極寒の年越しは、とても印象に残るものでした。

編集／発行 福岡市博物館 市史編さん室
814-0001 福岡市早良区百道浜3-1-1／TEL：092（845）5245／FAX：092（845）5019

TAKE FREE